

「未来への道しるべ」

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 1年 ^{おおたはら}大田原 ^{いつき}樹

「黄色い花が咲く頃はいつもあの人思い出す。たくさんの夢や大きな希望も叶わなかった人がいる。」

これは、私の母校宮崎大学教育学部附属小学校で毎年歌い続けてきた「黄色い花が咲く頃は」の歌詞である。5月の風薫る青空の下、黄金色のイペーの花を見上げるたびに、自然と口ずさんできた。

附属小の児童は、正門から入ると、校舎といとし子の供養碑に向かい一礼する。この供養碑は、1945年5月11日、集団下校中にアメリカ軍の空襲により犠牲となった、国民学校の児童16名を供養する石碑だ。毎年この歌をいとし子命の集いで全児童が斉唱する。犠牲者に思いを馳せ、こみ上げてくる涙をぐっと抑え、心で祈る。「どうかこの平和がいつまでも続きますように」

毎年、遺族や同級生の方々がこの集いで、戦争の悲劇や恐ろしさを私たちに話してくださった。どんなに無念だったことか。家族や友人、先生方の悲しみを思うと、胸が張り裂けるようで、とてもやるせない気持ちになる。いつの時代も私たち子供は大人が始めた戦争に巻き込まれ、どんなに抵抗しても逃れることはできない。心も体も深く大きく傷つけられ、あらゆるものを奪っていく戦争。私は武力での争いが、今も世界中で繰り広げられている事実が、恐ろしくて仕方がない。戦後81年が経過したものの、私には「まだ」と思えてならない。それはきっと、これまで実際に戦争を経験した方々が、直接話をしてくださったからなのだろう。自分の目の前にいる方が実際に経験したことなのだから、遠い過去のことではないと思えてならない。そんな戦争への不安を拭いきれない私が感銘を受けたもの。それは、日本国憲法第9条。私は、これを学んだ日の感動を今も鮮明に覚えている。「なんと気高く素晴らしい理念なのか」と。戦争という悲劇を二度と繰り返さないという強い決意が伝わってくる。

確かに公布後長い歳月が経ち、世の中は大きく変わった。今の憲法は時代遅れなのか、それとも普遍的な価値のあるものなのか。まだ中学生の私は、改憲か護憲かを判断する十分な知識はもち合わせていない。しかし私は、「武力での争いは絶対に認めるべきではない」と声を大にして訴えたい。戦争を経験した世代が私たちに残した「平和」という財産を絶対に守らなくてはならない。

これから先、日本を取り巻く世界情勢はさらに厳しくなるだろう。だからこそ、私たち国民全員が真剣に自分たちの置かれた立場を認識し、問い続けなければならない。改憲で、私たちの国が、そして私たちの生活や人生がどう変わるのか。主権は私たち国民にある。

歌の歌詞はこう続く。

「みんなの笑顔あふれる庭をいついつまでも守っていこう。平和への道しるべ いとし子の道」
守り抜きたい 平和を 私たちの手で